優秀賞

小さなお母さん

横内小学校（青森市）
五年　須藤愛凛

「うまくできないかもしれない。」
作る前は不安しかありませんでした。
　私の妹は、いすに上手に座れる年になりました。そこで
「愛凛もり乳食を作ってみよう。」
とお母さんが言いました。いつもはお母さんが作っているり乳食のご飯を私が作ることになったのです。
「においは変わるのかな。」
「どう変わるのかな。」
と作る前はいろいろな疑問がありました。一番の疑問は、色でした。私の家は健康のために玄米を食べています。ふつうのご飯として食べている時は、茶色の部分がはっきり見えていて、どんな形かがはっきりわかります。
「茶色のままかな。形はどうなるのかな。」
と思いながら、玄米のご飯をつぶしていきました。つぶしていくと、ねちょねちょしてきました。さらにつぶしていくと、形は米のかけらもなくなりました。そして色が真っ白になりました。
「このお米、本当に同じお米なの。」
私は、びっくりしてお母さんに聞きました。お母さんは
「びっくりしたでしょう。それだけ上手に作ったという証こだよ。」
と言いました。お父さんも
「上手にできたね。すごいね。」
と言ってくれました。
　次は、り乳食のご飯を妹に食べさせます。
「どうやれば食べやすいかな。」
と言いながら、食べさせる前にスプーンの角度をいろいろ変えてためしてみました。その時うかんだのは、り乳食の野菜をとても苦そうな顔で食べていた妹の表情です。
「また、私が作ったり乳食のご飯も苦そうな顔をするのかな。」
そう思いながら、おそるおそる妹の口にスプーンをもっていきました。妹はり乳食のご飯を口に入れたしゅんかん、にこにこしながら手足をバタバタさせて、おいしそうにしていました。
「その調子。」
と、お母さんが言いました。その言い方は、さっきまで心配していなかったかのような様子でした。
「なんで、ご飯はおいしそうに食べたのかな」
と言うと、
「ご飯はあまいからだよ。こんなに小さくてもご飯のおいしさが分かるんだね。」
と、お母さんが教えてくれました。
　次の日から、お母さんがいなくても、量を少しずつ調整しながらり乳食をあげられるようになりました。私はり乳食のご飯をあげることで、小さなお母さんになった気持ちになりました。その気持ちを味わわせてくれたお母さん。本当にありがとう。

優秀賞

山盛り盛子

横内小学校（青森市）
五年　澁谷羽奏

「山盛り盛子だなあ。」
給食の時、私は先生にこう言われます。みんなも
「わか、こんなに食べるの。」
とびっくりしたように言います。
給食の時、先生は
「減らしたい人おいで。」
と言います。そう言われると、ご飯の茶わんを持って、ご飯を減らしに来る人がたくさんいます。私は
「信じられないな。」
と思います。なぜなら私はご飯が大好きだからです。
「いつからご飯が好きなの。」
と先生に聞かれますが、いつから好きなのかはよくわかりません。でも、ふりかけをかけて食べるとおいしいし、納豆をのせるとご飯の味がのうこうになるのが、大好きです。ご飯は、味がよくて、甘みがあります。そして前にテレビで
「ご飯は、体を作る食品です。」
ということをやっていました。だから、私はご飯はよいところがたくさんあるので、大好きなのです。

私はご飯の中でもたきたてのご飯がお気に入りです。そのご飯を
「あっつい、あっつい。」
と言って食べることが大好きです。冷たいご飯だと、食感がたきたてとちがって、かたいので、私は絶対あたたかいご飯で食べます。
「おかわりする人、おいで。」
と先生が言いました。先生と私は必ず目が合います。私は
「はい。」
と言って、茶わんをもっていきます。
「今日も山盛り盛子にしたよ。」
と先生が言って、茶わんからはみ出すくらいにご飯を盛り上げます。私はパンの日は
「残してもいいかな。」
と思うのですが、ご飯の日は絶対に残したくありません。これは私のこだわりです。
でも、いざ山盛りのご飯を見ると
「今日は完食できないかもしれない。」
と不安に感じてしまいます。
でも、そんな時は、ご飯粒をまじまじと見るようにしています。ご飯粒は小さくて食べやすいし、形がきちんと整っていてきれいです。そういうのを見ていると、その米の中に一年間大事に育てている農家の方の姿が見えてきます。
私は、今バスケットをやっています。だから、ご飯をたくさん食べないと、体力がもちません。バスケットのようなはげしいスポーツには、「からだをつくる」ご飯がぴったりです。だから今日も
「山盛り盛子だね。」
と言われながら、山盛りのご飯を食べます。

優秀賞

待ちに待ったくりごはん

横内小学校（青森市）
五年　田中　駿（たなか　しゅん）

「待っていたんだよなあ。この季節。」
待ちに待った秋の季節がやってきました。秋になると、一年に一度の楽しみなご飯がぼくのところにやってきます。それは、となりのおばあちゃんが作ってくれるくりご飯です。ぼくがすむ雲谷でとれるくりを使ったくりご飯なので、おいしさは格別です。
「ぼくも手伝うよ。」
と言って、ぼくもくりご飯作りの手伝いをすることがあります。でも、ぼくができることといったら、くりむきぐらいです。
「包丁を使うから気をつけるんだよ。」
とおばあちゃんに言われて、包丁をくりの真ん中にグサッとさしました。あまり包丁を使いなれていないので、包丁が横にずれてしまうことがあります。
「ああ、むずかしいな。」
と言いながら、ぼくはお手伝いをしました。
いよいよ、くりご飯をたく時がきました。
「こんなにくりを入れるんだ。びっくりだなあ。」
と思うぐらい、おばあちゃんはご飯にたくさんのくりを入れていきました。
「はやく完成させて、みんなで食べたいな。」
「たきあがったときに、おいしく食べることができるといいね。」
と言いながら、くりごはんがたけるのを待っていると、甘いにおいがぷうんと全体にいきわたりました。
いよいよ、できあがったくりご飯を食べる時がきました。一口食べて
「わあ、甘い。」
と、ぼくはさけびました。くりの甘さがごはんにしみこんでいて、最高においしいのです。そして、ごはんをたく前には、多いかなと思って見ていたくりの量ですが、たきあがってみてみると、ちょうどよい量になっていました。
「おばあちゃんの目はさすがだね。」
と、ぼくは言いました。
ぼくがこのくりご飯が大好きな理由がもう一つあります。それは、家族の会話です。
「はしをとってちょうだい。」
「ねえ、ちくわとって。」
これがいつもの食事での会話です。でもくりご飯の時は
「わあ、本当においしい。」
「しゅんが入れたくりはあまいね。」
「おいしいからおかわりして。」
と、会話がとてもはずみます。
ぼくにとってのくりご飯は、一年に一度しか食べられないからこそ、
「待ってました。」
と言える、本当に大好きなご飯です。そして家族のご飯をにぎやかにもしてくれて、よりいっそうご飯をおいしくしてくれる最高のくりご飯です。今年の秋も楽しみです。

優秀賞

あきらめないぞ！

おおぞら小学校（三沢市）
五年 堀内愛斗

「自分が農家だったら、とっくにあきらめているなぁ。」

ぼくの家では、おじいちゃんがお米を育てています。ぼくは、稲を運ぶお手伝いをしているのですが、おじいちゃんは毎年たいへんな仕事をしているなぁと思うのです。

稲を大きく育てるには、とにかく手間がかかります。毎日、稲を見に行くなんて、めんどうくさくてつかれるじゃないですか。

タネをまいてしまえばおしまい、というわけにはいきません。苗を育てるハウスを作るのにも手間がかかります。葉を食べるがい虫や病気、雑草との戦いもあります。

中でも天気を見てちょう整するのが、とてもたいへんです。稲は温度が大切なのでハウスの温度も上げたり下げたり、台風や低温にそなえて田んぼの水を増やしたり減らしたりするのも、全部おじいちゃんです。

でも、おじいちゃんは言います。

「人が温度をちょうせつすることが大切だから、稲を育てるときは、人が心をこめているんだよ。」

社会科で米作りを勉強しました。写真でしょうかいされていた人たちの様子からは、心をこめて苗を植えていることが伝わってきました。その人たちの言葉には、米作りをするときの手間や苦労、たいへんなところがいっぱい書かれていましたが、しゅうかくのよろこびややりがいも知ることができました。

学校の体験学習では稲作りをしています。作業の前には、千葉さんが

「お米には八十八の手間がかかるんだよ。」

と教えてくれます。全校のみんなで田んぼに入って、どろだらけになりながらがんばります。学校の伝統になっている「苗は三本、心は一つ」を、みんなと声を合わせて言いながら、心をこめて植えました。じっさいに植えてみると、すごく楽しかったです。

一番心に残ったことは、仁くんのお父さんたちが、もう十四年も稲作りを手伝い続けてくれていることです。子どもが植えた苗はきれいに並んでないし、本数もバラバラ。めんどうをみるのはたいへんなはずなのに、当たり前のようにぼくたちを支えてくださる地域のみなさんには、本当に感しゃしたいです。

秋の稲かりの後には、五年生が活動の中心になって、お米を『おおぞら米』として地域のみなさんにはん売します。ただ売るのではなく、苦労や楽しかったことなどを伝えながらできればいいなと思っています。

同じころ、おじいちゃんの作った甘みのあってモチモチ食感のすごくおいしいお米も食べられます。おじいちゃんがいるから食べられると思うと、ありがとうという気持ちでいっぱいになります。ぼくも、家族においしいお米を食べさせてあげたいなという気持ちで

「やっぱり、農家になることはあきらめないぞー」と心の中で強く思いました。

優秀賞

お米でつながるぼくと祖父母

白鷗小学校（八戸市）
五年　川野輪（かわのわ）　真大（まひろ）

「おばあちゃんのところから送られてくるお米、めっちゃ、おいしい。」

ぼくの父は茨城県出身だ。毎年、年に一回は茨城県の祖父母のところへ行っていた。しかし、コロナのえいきょうで、二年ぐらい会っていない。

ぼくの家で食べているお米は、その祖父母のところから送られてきている。こっちから連らくするよりも先に

「そろそろ、お米が無くなるころじゃない。」

と、電話がかかってくる。茨城県に行けなくなってからは、特にお米のありがたみを感じるようになったし、何よりも、お米を通して、祖父母のことを思い出し、ご飯を食べるたびに、感謝の気もちでいっぱいになる。

「おじいちゃん、おばあちゃん、ありがとう。しっかり味わっていただきます。」

そんなふうに思いながら、一粒一粒大切に、残さずいただいている。

「ところで、送られてくるお米は、何という種類のお米なのかな。」

ぼくは、祖母に電話をして、お米のことについて聞いてみた。

「この辺りでは、コシヒカリが主だよ。うちでは、直接、農家から一年分まとめて買っているの。もみが付いた状態で保管しておいて、お米を送るときに精米しているよ。」

「そうだったんだ。」小さいころからずっと、当たり前のように食べていたお米だが、ぼくの口に入るまでには、たくさんの人々が関わって大事に育てられているんだ。そう思うと、最後の一粒まで味わっていただかなければ、ばちが当たる。

ぼくは今、五年生。一学期に理科の学習で「発芽」の勉強をした。そのとき、イネを実験で使った。発芽に必要な条件がそろうと、イネはちゃんと芽を出した。

「こんな小さなものから、一体どのくらいの米粒ができるのだろう。」

そう思っていると、担任の先生が

「バケツで育てられると思うよ。」

と教えてくれた。

「よし、やってみよう。」

ぼくは、一学期の終わりにイネを持ち帰り、バケツで育ててみることにした。と言っても、イネを育てたことなんて一度もないので、バケツ稲の育て方を調べることから始めた。

「稲ってこんなに手がかかるんだ。土や水の管理だけでも大変そうだ。天候にもかなり左右されそうだ。」

うまくいくかどうかは分からないけれど、ぼくは今、イネを育てている。毎日、様子を見て水の調整をしている。秋には米が実るだろうか。とても楽しみだ。

祖父母とは、なかなか会えないけれど、お米でつながっている。そのことに感謝して、これからも、最後の一粒まで大切に食べたいと思う。